

狸雜載

〔燕石雜誌〕四兔大手柄

土舟潛確願書云、滄州有流永渠、金石皆浮洲、人以瓦鐵爲船、といふ事あれば、かゝる流水には土舟をも浮ぶべし、亦ともすればとまりに去つむつち船のうきてし方ぞ戀しかりける、爲家卿の歌也、この土舟は土を積たる船なるべし、夫木集にはくちふねとありて、異本につちふねと傍注せり、いづれが是なるや、又潛確類書、舟師名黃頭郎、以土勝水故名とあれば、狸が土舟を造れりと作せしは、土もて兔の水徳スイトクに勝ん爲歟、亦佐渡國雜太郡サタマノニツ岩といふ山に、彈三郎といふ老狸あり、其處より一里ばかり山中に、勝々山土舟の林など唱る山林あり、土俗の説に、むかし兔に撃れたる狸は、彼彈三郎が親なりといひ傳へたるよし、曩に彼地に赴きたりし友人、曳尾菴いへり、こは附會の説なり、證とするに足らず、彈三郎が事は次の卷にいふべし。

〔一話一言四十一〕狸塚

上州館林茂林寺禪宗より一里ばかり西に、狸塚ムシナツカといふ村あり、一村狗を畜ふ事を禁ず、高源寺といふ寺あり、茂林寺の末寺也、かの文武火の茶釜は貳斗ばかりもいるべき大きなもの也、蓋はなしと云、高源寺開山を正鶴といふ、今より二百八十年ばかりむかし也と、狸塚のもの丈助物語れり。

猫

〔本草和名十五〕猫膏音端、一名猫純口似純極、和名美。

〔倭名類聚抄毛十八〕群名、猫、唐韻云、猫音端、又音美、似豕而肥者也、本草云、一名猫純獸屯、二音。

〔箋注倭名類聚抄獸七〕按廣韻及說文、徐音並云、猫他端切、屬透母、不屬端母、此以端音猫、恐誤、廣韻

又云、他畔切、在二十九換、且在二十八翰、此云一音且、亦恐誤、下總本有和名二字、本草和名、猫膏、和名美、新撰字鏡、貉同訓、今俗呼美狸、或万美、別有万美狸、或譌呼万米狸、是陶弘景所云猫狸也、莫以

其名相似而混矣、略中、廣韻同、唯猫作猫、集韻、猫又作猫、按爾雅釋文、引字林云、猫似豕而肥、孫氏蓋